

完全否定の陳述副詞の生起条件

言語学四年 吉田雄大

「全く」「さっぱり」等の副詞は、否定文で現れ、〈程度〉〈量〉〈頻度〉の側面を全面否定する働きをする（cf. 工藤 1993）。

- (1) a. 優子は **ちっとも** 日本人らしくない。 （程度の全面否定）
- b. 太郎はその本を **一切** 読まなかった。 （量の全面否定）
- c. 今年の夏は **全く** 雨が降らない。 （頻度の全面否定）

このような完全否定の陳述副詞は、意味的に、一回性で、頻度を論じる余地の無い文には生起できないという特性を持っている。たとえば、次のように、動作主が特定の個人及び個体である文には生起できないことがある。

- (2) a. 今の調子では、{ 阪神はあと数年 / *今年の阪神は } **ゼンゼン** 優勝しないだろう。(杉村 2001 11a,b)
- a. パーティーに { 友達 / *太郎 } が **ちっとも** 来ない。
- b. 昨日から { 生徒の姿 / *次郎の姿 } が **少しも** ない。
- c. { 出兵した兵士 / *出兵した母方の祖父 } は **全然** 生き残っていない。

また、動作の対象が特定の個人及び個体である文にも完全否定の陳述副詞が生起できないことがあることが知られている。

- (3) a. 花子は { 去年の大学入試 / *九大の二次試験 } に **一切** 合格しなかった。
- b. 日本は { 環境大国 / *第二次大戦の戦勝国 } に **ちっとも** なれなかった。
- c. 記憶喪失になった弟は { 僕のこと / *僕の名前 } を **まるで** 覚えてない。

本論文では、以上のような、従来の研究において知られている完全否定の陳述副詞の否定における側面(1)や共起する動作主及び動作の対象の複数性という観察(2),(3)に加えて、(4)も観察されることを指摘した。

(4) 動詞に関する制限

完全否定の陳述副詞は一度きりの行為を表す瞬間動詞、及び、完了を表す複合動詞+継続動詞とは共起することができない。

まず、状態動詞・継続動詞・第四種の動詞の場合には、完全否定の陳述副詞が共起可能

である。

- (5) a. 休日の教室には **全く** 人が居ない。(状態動詞)
b. 橋は下戸なのでお酒は **まるで** 飲まない。(継続動詞)
c. 私と姉は昔から **ちっとも** 似ていない。(第四種の動詞)

これに対して、次のような動詞の場合には、完全否定の陳述副詞が共起しないのである。

- (6) 瞬間動詞
a. *北島は泳ぎがうまいので **少しも** 溺れない。
b. *几帳面な佳奈は財布を **少しも** 紛失しない。
c. *搭乗して四時間たったが **全然** アメリカに到着しない。
- (7) 動詞+完了の複合動詞
a. *太郎は その本を **一切** 読みきらなかった。
b. *健太は朝ごはんを **全然** 食べ終わっていない。
c. *従妹の娘は **少しも** 泣き止まない。

同様の観察は、程度の副詞「少し」の生起制限を記述する際にもあてはまる。完全否定の陳述副詞が容認可能な文では、対応する肯定文に「少し」が生起可能であり、完全否定の陳述副詞が容認不可能な文では、対応する肯定文に「少し」が生起できない。

- (8) a. 今日は**全然**暑くない。 / 今日は**少し**暑い。
b. 太郎はその本を**一切**読まなかった。 / 太郎はその本を**少し**読んだ。
c. 健太は朝ごはんを**全然**食べていない。 / 健太は朝ごはんを**少し**食べた。
d. 従妹の娘は**少しも**泣かない。 / 従妹の娘は**少し**泣く。
- (9) a. *太郎はその本を**一切**読みきらなかった。 / *太郎はその本を**少し**読みきった。
b. *健太は朝ごはんを**全然**食べ終わっていない。 / *健太は朝ごはんを**少し**食べ終えた。
c. *従妹の娘は**少しも**泣き止まない。 / *従妹の娘は**少し**泣き止む。

参考文献

工藤真由美(1993)「否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』39: 69-107.

杉村泰(2001)「否定福祉ケツシテの意味分析」『言語文化論集』231: 71-86.

杉村泰(2002)「否定福祉ケツシテとカナラズシモの意味分析：全部否定と部分否定の間」『言語文化論集』23(2): 123-133.